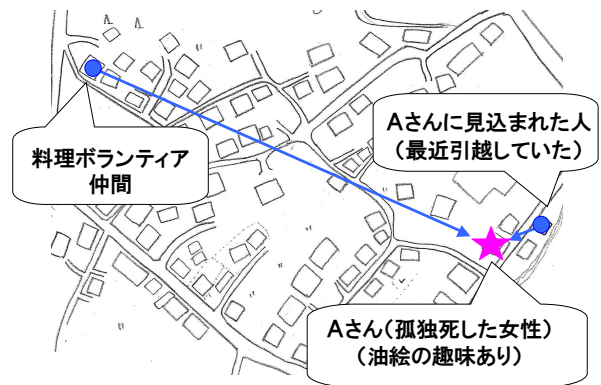


要援護者の お楽しみに乗る

死後2週間で見つかった引きこもりの女性。その後、2人には心を開いていたことがわかった。もう一つ。家の壁面には、所狭しと彼女の描いた油絵が架かっていた。ここからアプローチすれば、状況は違っていたかもしれない。



住民流福祉総合研究所

木原 孝久

〒350-0451 埼玉入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

電話・049-294-8284

Eメール kiharas@msh.biglobe.ne.jp

ホームページ <http://www5a.biglobe.ne.jp/~waku/>

はじめに

かつて、厚労省の「地域福祉計画策定の指針」を読んでいて、地域福祉とは、どんなに要援護になっても住み慣れた家や地域で、安全かつその人らしく生きていけるように支えることと書いてあるのに感動した。「その人らしく」とは、その人のライフスタイルを全うさせよ、自己実現を応援せよということだ。

ところが、関係者で「その人らしく」という言葉を使う人はあまりいない。たまにいても、ほとんどお題目的に使っている。私自身はかつての「感動」をまだ持ち続けている。この考え方によれば福祉のあり方は全面的に変わってくるのだ。

本冊子は、福祉の目的を「その人らしい生活の支援」と規定した場合どういふことになるのかを徹底的に追求してみたものである。この考え方を実際に福祉の現場で、難ケースにぶつかっているワーカーに適用し、喜ばれている。

「その人らしく」に到達するには、2つのハードルを越えなければならない。福祉は当事者の抱えた問題を解決してあげることという、いかにも当たり前の事実が、じつは私たちを誤った対応に導いてもいることに、気づかねばならない。

もう一つ、この発想は当事者が福祉の主役だということ。当事者の意向に徹底して寄り添おうという気がなければ、こんな贅沢な福祉は受け付けないのではないか。

目次

- 1.問題解決を阻むものは？< 3 >
- 2.当事者は問題を解決したくない？< 3 >
- 3.当事者の「奇妙な行動」が気になる< 5 >
- 4.福祉の本来の目的は何だったか？< 8 >
- 5.「自分らしく」を柱にした福祉とは？< 11 >
- 6.豊かさダイヤグラムで「らしさ」を測る< 19 >

1.問題解決を阻むものは?

(1)福祉とは要援護者の心身や生活問題解決の支援である

- ①だから当然、私たちは対象者の抱えた問題に関心を集中させる。
- ②それ自身は間違っていないのだが…
- ③問題に関心を集中させることでお留守になっている部分はないか?

「お留守になっている」とは、もっと大事なことがあるのに、それに目もくれないので、却って問題解決自体が難しくなっている部分はないのか、ということである。

変な話だが、私たちの目が相手の「問題」にばかり向いていること自体が、別な問題を生じさせている、ということも考えられるのだ。

(2)問題解決を阻むものがある

「阻むもの」としてどんなことが考えられるだろうか。

- ①本人が問題解決の努力をしない
- ②問題解決の支援を拒否、または乗り気でない
- ③支援の方法が見つからない
- ④やるだけはやったが不十分

③と④は仕方がないとして、気になるのは、①と②だ。まさかと思うのだが、やっぱりこう考えざるを得ないと言えるケースが、現場では少なくない。

2.当事者は問題を解決したくない?

(1)現場でよく見聞きするのが、意外な事実

- ①どうも本人が問題解決に乗り気でないようだ。
- ②支援の手を拒否する人もいる。

本人は問題を解決したいに決まっている、という前提で私たちは対象者に向かう。ところが相手の態度を見る限り、その前提が崩れそうな時がある。「問題解決に乗り気でない」「支援の手を拒否する」とは一体、どういうことなのか？

(2)その人の「心の内」を推測してみたら…

そこでその人の心理を分析してみたら…

- ①もしかして問題から逃げているのでは？
- ②自分の問題をほじくられるのがイヤ？ 「俺の問題に触るな」か？
- ③自分は問題を抱えていないとでも思っているのでは？

しかしどう見てもそれは「問題」だ。本人も自覚していないはずはない。しかも、その問題を解決したくないはずはない。一体、どういうことなのか…

(3)たしかに「要援護者特有の心理」がある

- ①人間は自分か問題を抱えていることをできれば意識したくない。
- ②そのことを他人に指摘されるのは心が痛む。
- ③誰でも「自分は問題を抱えていない」という顔をしたがる。
- ④助けてもらうには自分の惨めな部分をさらけ出さねばならない。
- ⑤問題に直接触らないで問題を解決してもらいたいと願っている。
- ⑥問題は結局、自分の手で解決したのだと思いたい。

誰かに助けてもらうということはたしかに人間としてのプライドが危機に瀕する、という意味では、これらの気持ちは尊重されなければならない。助けの手を拒

否している人でさえ、これらの心理は間違いなくあるのだから。

(4)それにしても、ちょっと無茶な願いではないの？

助けてもらう側の心理はわかるとしても、やはり担い手の側としては、一言言いたくもなる。

- ①問題を解決してあげようというのだから素直に指示に従うべきだ。
- ②プライド云々というのも、ちょっと贅沢に見える。
- ③誰でも問題解決には犠牲にしなければならないこともあるのだ。

と考えると、これらは本人の我が儘、身勝手としか考えられないのだ。こういう対象者に対して担い手側はかなり厳しい見方をしている。「頑固」「プライドが高い」「我が儘」…。そうか、プライドが高いのはいけないことなのか…

3.当事者の「奇妙な行動」が気になる

(1)問題に目を向けず、何かに没頭して(こだわって)いる

支援の手を断ったり、問題解決にあまり乗り気でなさそうなそんな当事者に共通に見られる、ある奇妙な行動。これは一体、何だ？

- ①深刻な問題を抱えているにも拘わらず本人は何かに没頭している。
- ②こちらは問題解決に取り組んでいるのに本人は目もくれない。
- ③こだわっている対象は、大抵は趣味とか遊びといったたぐいだ。

趣味を楽しむのも悪いとは言わないが、もっと問題解決に真剣になってほしい。「あんたねえ、今はそんなことをやっている場合じゃないでしょ」と言ってあげたい。ワーカーの心の内を分析すれば、この一言を言いたがっている人が少なくない。

(2)ここで見えてきた「すれ違い」

担い手と当事者の間に考え方や行動にずれというか、すれ違いのようなものが出てきているのではないかと。客観的に自己分析してみたらどうか。

- ①周り（担い手側）はその人の「問題」に関心を集中させている。
- ②本人はそれよりも自分の「趣味」などに没頭している。
- ③周りはその趣味活動に関心がない。むしろ不愉快に思っている。
- ④本人は抱えた問題をどうしたいのか、曖昧な態度を続けている。

両者の関心の対象が違うのだ。当事者は趣味等のお楽しみ活動、担い手は相手の抱えた問題だ。これでは当事者に分がない。担い手が不愉快に思うのも無理はない。

(3)ひるがえって、私たちのあり方はどうなのか

たしかに当事者側に分がないが、それでもこの際、担い手側のあり方を見直してみたらどうか。当事者は何も語らないから、そちらには確かめようがない。

- ①私たちは担い手の側からのみ相手を見ていないか。
- ②本人の側からこの奇妙なすれ違いを見直そうとはしないのか。
- ③問題に目を向けず、趣味に没頭する心の内は何かを考えてはみないのか。
- ④その人なりの論理を本人の側から肯定的に考えてみたらどうか。

ここで求められるのは、担い手の言い分は一旦、脇へ置いて、当事者の側からものを考えてみるという姿勢である。私たちは当事者の立場からものを見るという習慣ができていない。今の福祉界は徹底的に担い手主導でできているから、そういう姿勢になかなかかなりにくいのだ。

(4)問題が解決しない-もう一つの理由

担い手側も、わが身を振り返ってみる必要が、別の観点からもある。

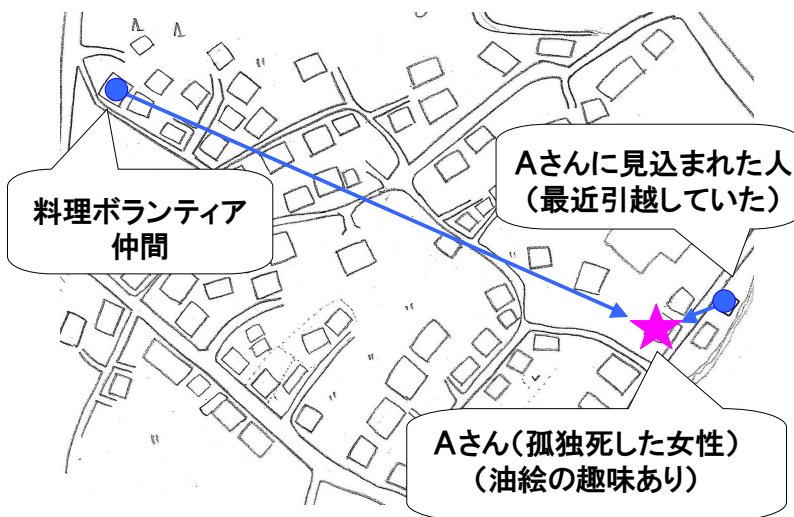
- ①相手の問題に関心を集中させるのはいいが、しかし…
- ②問題ばかりを取り出しても、そこから解決の糸口は出てこない
- ③問題そのものには解決へのヒントはたいして含まれていないのだ

私たちは間違った問題解決法を採用していたのではないか。問題を解決したいから、できるだけたくさんの中身を拾い出す。そしてそれを並べる。そこから何か解決のヒントは出てこないかと考える。そういう作業を現場でやっていないだろうか。これが今の福祉関係者の問題解決行動の最大の問題点だと言えるのだ。

(5)問題だけを並べてもそこから解決の糸口は出てこない

関係者によるケース検討会に顔を出した。一つのケースが提示される。その中身を見ると、そのケースの抱えている問題ばかりである。「頑固である」「プライドが高い」「ゴミ屋敷」「暴言を吐く」「身なりがだらしない」「仕事をしていない」「引きこもりである」「サービスを拒否している」。

これらの事実をもとに、その人の問題解決策を考えるとするのは、無理な話だ。



問題をいくら並べても、そこから解決のヒントは見つからないのだ。

そこで誰かが言い出す。「もう少し情報があれば…」その通りなのだ。その人に関するもっと別の情報があれば、そこから解決の糸口が見つかるのだ。ではその「別の情報」

とは何か。

孤立死した一人暮らし女性の件で、町内会役員とマップ作りをした結果である。誰とも交流していなかったということだったが、じつは二人の人に支援を求めていることが分かった。マップ作りでこういう事実が見つかるのだ。

この二人を通して接触するという手のほかに、じつはもう一つの手があった。彼女の部屋を現場検証したら、壁いっぱいには油絵が飾ってあったというのだ。彼女は油絵に夢中になっていた。おそらく絵を学んだり楽しむ仲間がいたのではないかな。

生前にこのことが分かっていたら、ここから接触することができたのではないかな。「絵の個展を開きましょう」「常設美術館を作りませんか」「即売もしましょう」などと。こちらには反応する可能性は高い。自分のお楽しみに乗ってくれるのなら、意外に門戸を開けるものなのだ。油絵仲間の働きかけにも応じるかもしれない。

「別の情報」とは、「油絵を楽しんでいる」という事実である。ケース検討会でこの一言が提示されたら、みんなこれに取りつくはずである。

4.福祉の本来の目的は何だったか？

福祉の目的は当事者の抱えている「問題」を解決すること、であったが、どうもそれだけではなさそうだ。それよりも重要な目的があるのかもしれない。それにアプローチするために、サービスを拒否したり、問題の解決に真剣でない人たちが共通に持っている、「何かへのこだわり」の分析から入ってみよう。

(1)本人がこだわっているものがある。「こだわり」とは何か？

- ①自分のやりたいことをやる
- ②ライフスタイルを全うしたい
- ③自分の生きる目標を実行したい
- ④メシより好きなことをしたい
- ⑤自分に与えられた天命を実行したい
- ⑥自己実現を図りたい

「こだわり」とは、本人が真剣に追求していること、問題を抱えているにもかかわらずそこには関心が高い、ということだ。おそらくそれが福祉問題の解決にどこかでつながっているのではないかと考えられる。

要するにこれは、本人の生きる主目標と考えられないか。これが福祉かそうでないかは別として、誰でも、生きているということはこれを追求しているということだ。それを否定することもできないし、阻む権利もない。

福祉問題を抱えている人は、そんなことは脇に置いて、問題解決の方に力を注ぎなさいと言うのは、やはりおかしい。どんなに問題を抱えていても、その解決行動とは別に、これを追求する権利はあるのだ。

<認知症の女性の勝手な行動に手を焼くケアマネ>

支え合いマップ作りでこんなケースが見つかった。認知症の女性で、毎日家の周囲を歩き回りながら、今日は友達の所に行こう、今日は趣味グループに入れてもらおう、今日はゲートボール

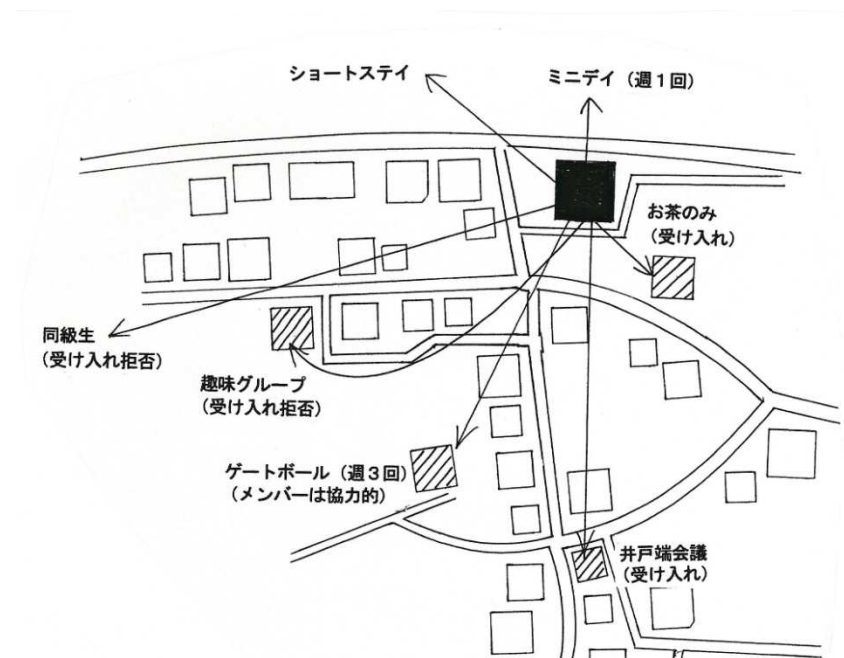
に加えてもらおう、今日はサロンに入れてもらおう、今日は井戸端会議に入れてもらおうとやっていた。

ところが担当のケアマネはこれを苦々しい思いで見ている。あちこち歩き回ったら危ないので老人ホームに入らましょと説いているのに、聞き入れ

られない。本当に交通事故にでも遭ったらどうするのか、気が気でないのだ。

彼女はこれが、自分がやりたいことだと主張している。いわば彼女のライフスタイルだ。それを全うしようとしている。これが彼女の生きる主目標。ところがワーカーはそれに意義をさしはさむ。あなたは今、福祉の対象なのだから、そちらはあきらめて、(福祉の目的である)安全を図るために老人ホームへ入りなさいと言っている。

本人の主張を尊重するか、福祉のプロであるケアマネの指導に従うべきか。端的には人生の主目標を大事にするか、福祉の実現を大事にするかの闘いになっている。



(2)福祉は「自分らしい生活」の応援だった

- ①地域包括ケアは「当事者の自分らしい生活を支援すること」と
- ②「自分らしい生活」とは「こだわりの実行」ではないのか
- ③本人は当然、自分らしい生き方をしたい
- ④それをまず応援するのが福祉だった

厚労省は何十年も前から「その人らしい（自分らしい）生活の支援」と言い続けているし、関係者もわかっているはずである。これが単なるお題目になっている。

大事な事実がある。肝心の本人は、このことを大事に思っているということである。問題解決よりもまずは自分らしい生活がしたいのだと。それが「こだわり」行為となって表れている。本人の意向を大事にしたいのなら、そのこだわりに乗るのが、福祉関係者が第一にやることではないのか。問題解決にこだわっている関係者は、このことが分かっていないのだと理解されても仕方がない。

(3)では従来の「問題の解決」は何なのか？

- ①むろんそれも「福祉」には違いない
- ②ただこれを本人の立場から見直してみたらどうか？
- ③まずは「自分らしい生活」の実現があり、一方で問題も解決したい
- ③あくまで前者が「主」で、後者が「従」
- ④できれば「主」の追及の中で、ついでに「従」も解決できればと…

④にあるように、両者は密接に関連しているらしいのだ。だから、「問題」を横目でにらみながら、本人の「自分らしい生活」の追及を応援していく。その中で「問題」が解決できないものかと。本人の「自分らしい生活」欲求の熱意を、問題解決にどう振り向けさせるかが私たちの知恵の使いどころかもしれない。

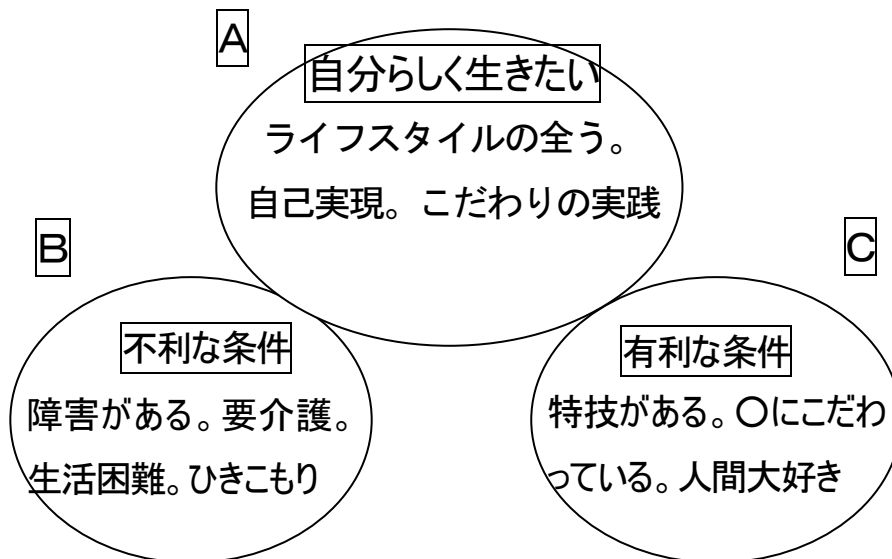
5. 「自分らしく」を柱にした福祉とは？

では、「自分らしい生活」の実現を柱にした福祉は、どのような内容を持ち、どのように実践していくものなのか。

(1)「自分らしく」実現型福祉の基本構図は？

- ①まず福祉の主目標を「自分らしく生きたい」の実現に設定。(A)。
- ②これを追求するための有利な条件と、不利な条件がある。
- ③不利な条件 (B) は当人の福祉問題。障害、要介護、生活が困難
- ④有利な条件 (C) は、特技がある、こだわるものあり、人好き
- ⑤「不利な条件」を抑制し「有利な条件」を生かして目的達成。

図を見ていただきたい。「自分らしい生活」をしたい本人に二つの「条件」が張り付いている。一つは「不利な条件」が足を引っ張り、「有利な条件」が押し上げてくれる。両者をうまく操りながら、目的を効率的に達成するのだ。



(2)「自分らしく」実現型福祉で何がどう変わる?

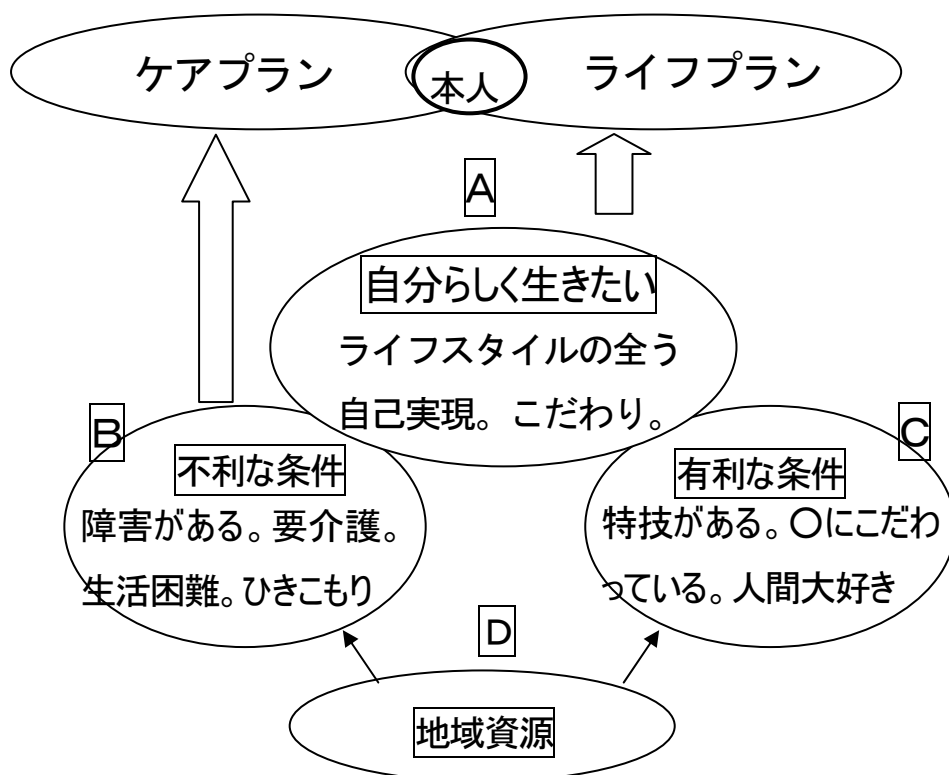
①従来の福祉Bは「自分らしく」を果たすための手段

「自分らしく」を目指すために、今どういうサービスが必要なのかを考えながらケアプランを作るのが筋なのだ。今はそうした目標を無視して、ただただ要介護度を下げるためのケアプランになっている。目標を失った営みだ。

②Aを充足させるためにライフプランを作成する。

まずライフプランを作成し、それを実現させるためにケアプランを作成する。両者を相互に関連させながら作っていく。両者を別々に作ってはいけない。

どちらのプランも、ケアマネが入った方がいいし、住民も加わった方がいい。



③Cを強力に後押しする地域資源の発掘に力点を移すこと

前掲の図に新しい部分Dが加わる。今までは問題解決のための資源ばかりを探していた。見守ってくれる人、要介護者のサポートをしてくれる人など。これからは、それ以上に「自分らしい生活」を後押しする資源の開発に力点を移さねばならない。

④「自分らしい生活」支援に求められるのは主に住民資源

今までは（生活障害に関わるために）公的支援がメインになってきた。「自分らしく」は公的支援の対象にならないし、馴染まない。これこそが地域住民の出番だ。

⑤社会全体から福祉の営みを切り離さず、統合的に捉える

今は「その人らしく」の支援は「福祉」の領域ではない、という理解がある。そうすることで、意図的に福祉を社会全体の営みから切り離し、独自領域として確立したがつているが、そのことで肝心の当事者の福祉が損なわれることもある。

⑥「自分らしく」の実現には良質の人材が必要

「その人らしくの実現」と対象が広がったことで、その実現に必要な資源の探し方が違ってくる。福祉機関の役割は少なく、代わりに地域資源の出番が多くなる。

それだけでなく、できる限り良質の資源が求められる。前掲の孤立死した女性の「油絵」の場合も、個展を開くとなると、必要なのは絵画関係者の協力だ。ただ絵が好きだというだけでは困る。個展を開くための人脈を持っている人、絵の出来具合を評価できる眼力の持ち主でなければならない。

同じ資源でも、できる限り高級資源であってほしい。当事者はハンディキャップを抱えているから、並みの資源を使ってもあまり役に立たない場合もある。

⑦守秘義務の障害も消えていく

Cのライフプランと、Bのケアプランを一体として作成するとなると、障害になるのが守秘義務であるが、これをクリアできる可能性もある。

人間は自分の抱えた問題は公にしたくないし、したがってプライバシーの尊重を強く主張する。しかし「自分らしく」と、指標を高く掲げれば、それを隠す必要はなくなる。「豊かに生きるのを支援してもらおう」のを隠す必要はあまりないのだ。

(3)「自分らしく」支援型福祉による問題解決行動の手順

①本人の願いと実際を確認のため豊かさダイアグラムを作成する。

同時にそれをもとに本人はこれからどのように生きていきたいのかを聴取し、ライフプランを作成する。そして当面実現すべき目標をリストアップする。

②当面の目標達成への「有利な条件」と「不利な条件」を調べる。

□Bと□Cの中身を丁寧に調べるとのこと。できれば本人に直接聴取できればいい。

③そのうえで、目標達成のための作戦を練る。

□Aをめざしながら、ついでに□Bの問題も解決していく方法がないかも考える。

④支え合いマップ作りの中で、ライフプラン実現に役立つ資源を探す。

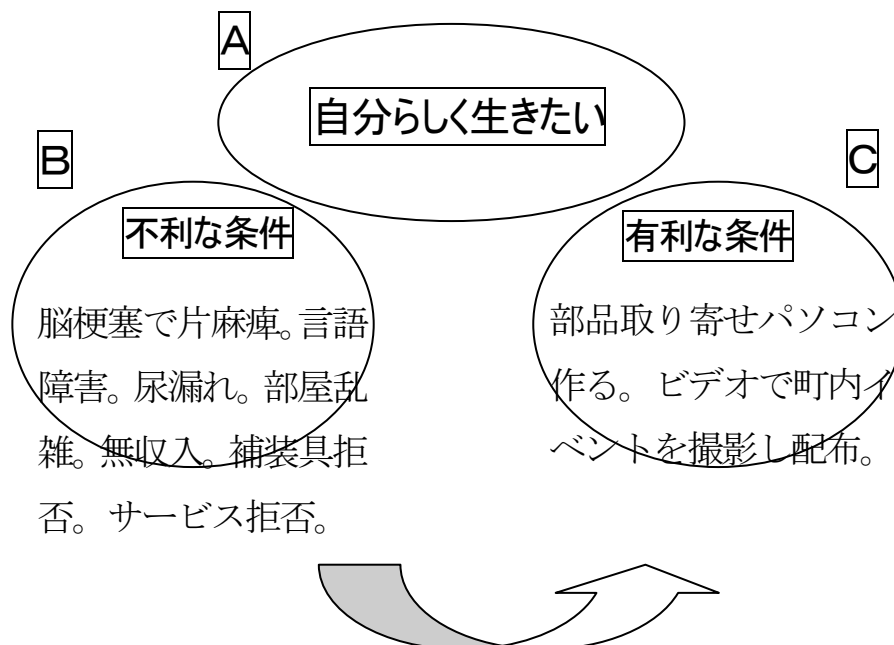
資源と言っても、地域が本人に対して資源となる場合もあるし、逆に本人が資源になりそうな対象も地域から探す。それに資源として関わることで、本人の豊かさダイアグラムのどこかを充足させるかもしれないからだ。

⑤□Bと□Cと□Dを組み合わせて、当面の目標の実現策を練る。

(4)「自分らしく」支援型福祉による問題解決の実際

〈事例1〉

一人暮らしの高齢男性。中村さん（仮称）。様々なハンディを抱えている。ポイントは、ハンディに変わるたくさんの能力を持っている。これを生かせばいい。



補装具拒否は本人曰く「使い勝手が悪いから」。サービス拒否は「自立意欲を失うのがこわいから」。自立志向の表れで、むしろ「有利な条件」だった。それにパソコンを組み立てる技術があるし、創意工夫が得意。ボランティア精神もある。これらを生かせないか。



- ①パソコン組み立て講座を開く（その支援）。
自宅で開けば「部屋はきれいにしよう」。
- ②ビデオ講座も開ける。両講座で収入も。
- ③創意工夫の腕を生かし、片麻痺でも着脱できる補装具を関係者と開発。生活の不便も解消。
- ④町内会などからビデオ作製を有償で依頼。
パソコンの修理・請負も含めて事業に。

中村さんの豊かさ満開作戦。メカ好き、自立意欲を生かして豊かさ満開へ

①左側の「不利な条件」を挙げると、こんなにたくさんある。悪いことばかりである。地域資源の方を当たるが、これといったものはない。地域の働きかけに本人が応じないのが痛い。

②興味深いのは、「サービス拒否」「補装具拒否」だが、よく調べると、「サービスが入ると自分がだめになる」と考えているらしい。「補装具拒否」も「歩きづらいから」だと。この人は自立意欲が強い人なのだ。

③彼はパソコンが趣味で、部品を取り寄せては自前のパソコンを作っている。ビデオも好きで、地域の花見会をビデオに録り、DVDにして全員に配ったという。趣味を生かしてのボランティアにも熱心であった。

④身の不便をどうしようかというよりも、豊かに生きることに強い関心があるのだ。これをさらに後押しすればいい。そちらの方の働きかけには素直に応じるのではないか。

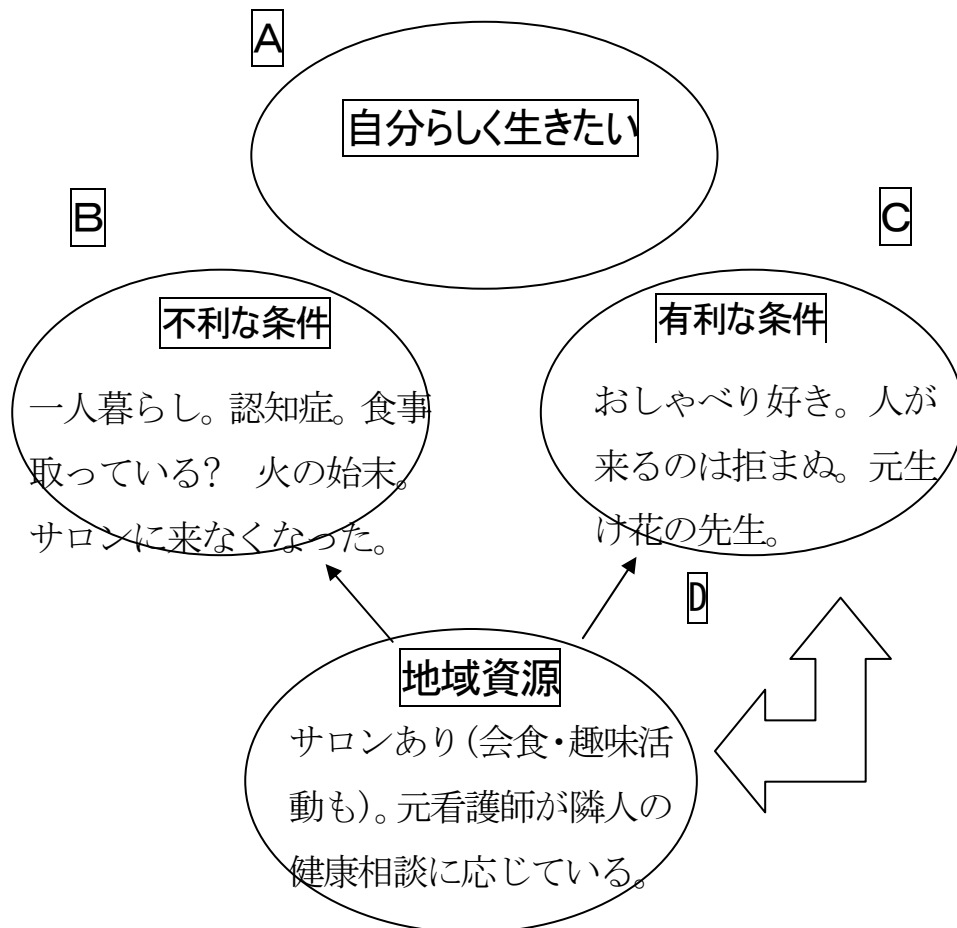
⑤そこで、地域でパソコン教室を開いてもらう。できれば彼の自宅で開けば、みんなが来る。あまり部屋を汚くしているわけにはいかない。少しは掃除をしようという気になるのではないか。場合によっては、訪れた人が、ついでに掃除を手伝えればいい。

⑥自立意欲が強く、メカに強い人ならば、片麻痺でも服を着脱できる補装具を関係者と一緒に開発したらどうか。尿漏れや部屋が乱雑というのは彼の障害による。それが解決できれば、それもなくなる。

⑦それにパソコン講座やビデオ講座を有償で開けるように支援すれば、若干の収入も見込める。片麻痺でも着脱できる補装具を開発すれば、そこからも収益が見込める。地域の応援はそのあたりにポイントを置けばいい。

〈事例 2〉

一人暮らしの認知症の女性。田中さん（仮称）。心配な面が多いが、地域資源をうまく使えば、なんとかなりそう。その場合に彼女の能力も生かせばいい。



本人の利点と地域資源を結んで…

- 自宅へ押しかけサロン。料理も持参。一緒に調理も（火を使える）。看護師が同道して健康チェック。本人に花を活けてもらう。
- 以降、押しかけサロンを日常化。見守りと会食を兼ねて。
- 町の各所に花を活けてもらう。有償にすることも。

田中さんの豊かさ満開作戦。押しかけサロンならどうだ。そこに料理持参

- ①79歳の認知症の一人暮らし女性。ちゃんと食事をしているかが心配。火の始末も大丈夫か。サロンに誘っても来ない。ちょっと心配な人だ。
- ②サロンには来ないけど、人が来るのは拒まないことがわかった。おしゃべりは好きな方だという。以前に生け花の先生もしていた。認知症になってそんな楽しみをあきらめるようになったのか。そこそこに豊かさ志向はある、と読める。
- ③そこで解決策。まずサロン不参加の問題。サロンには来ないが、人が来るのは拒まない、おしゃべりは好きというのなら、「押しかけサロン」をやればいい。サロンを開いているメンバー数名が彼女の自宅を訪問して、即席のサロンにしてしまう。
- ④彼女には食事の問題もあるので、サロンで作った料理を持参すればいい。または彼女の家で、彼女も参加して料理を作る。その時なら火を使っても大丈夫。
- ⑤そこに、マップで見つけた元看護師を生かす。彼女は周りの人の健康相談に応じているというので、「押しかけサロン」に同席してもらって、彼女の体調をチェックする。
- ⑥一方、本サロンでは認知症の学習もする。メンバーのだれもが、彼女への適切な関わりができるように。
- ⑦押しかけサロンも、料理のおすそ分けも、看護師の訪問も日常化する。
- ⑧彼女に花を活けてもらい、地域の各所に飾る活動を始めるともいい。彼女にしても望むところではないか。

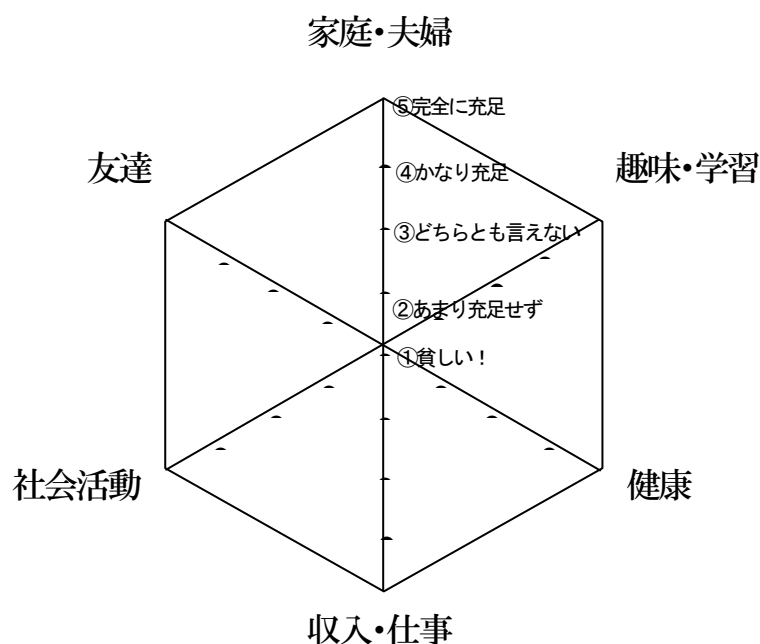
6.豊かさダイヤグラムで「らしさ」を測る

「自分らしい生活」がどの程度できているかを測る物差しはないだろうか。あるいは、「自分らしい生活」の目標設定に役立つような目安はないだろうか。本研究所では「豊かさダイヤグラム」を開発した。

(1)豊かさダイヤグラムの測り方

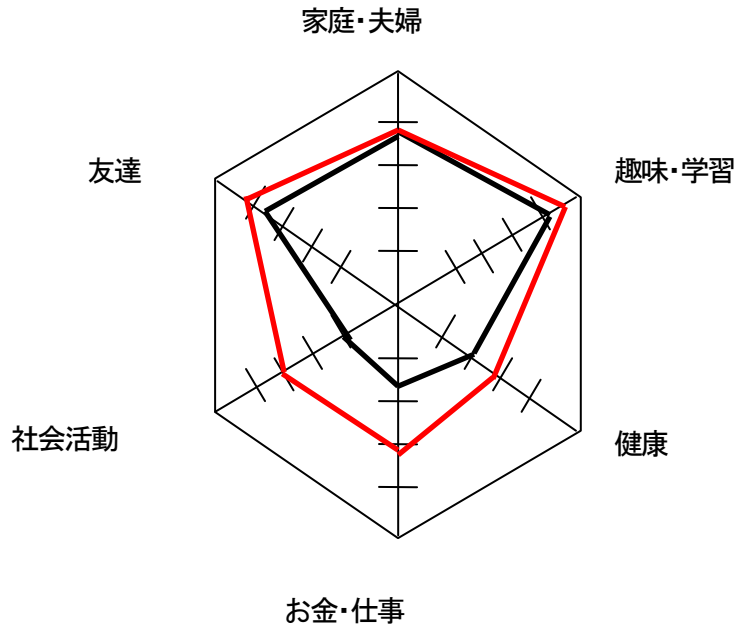
①自分らしくの充足度を測る「豊かさダイヤグラム」とは？

項目はここにあるように6つ。①仕事・収入、②健康、③趣味・学習、④家族・夫婦、⑤友達・ふれあい、⑥人に尽くす。ボランティア。たくさんの人に「豊かになるには何が必要か」と聞くと、大抵はこの六つの項目が出てくる。これで豊かさを測り、充足度が満開ならば自分らしく」生きたことになる。



②項目別に充足度を5段階で評価し、6つの点を結べば豊かさ満開度

例えば認知症の80代の一人暮らしの女性。「趣味」は畑で野菜作り。収穫した野菜でおしんこを作っている。その畑で隣り合った仲間（3人）とおしゃべり（「友達」という。家族では、妹がすぐ近くに住んでいて毎日様子を見に来る。火は使わせない。娘が時々やって来る。その他も合わせて以下のような充足状況になる。

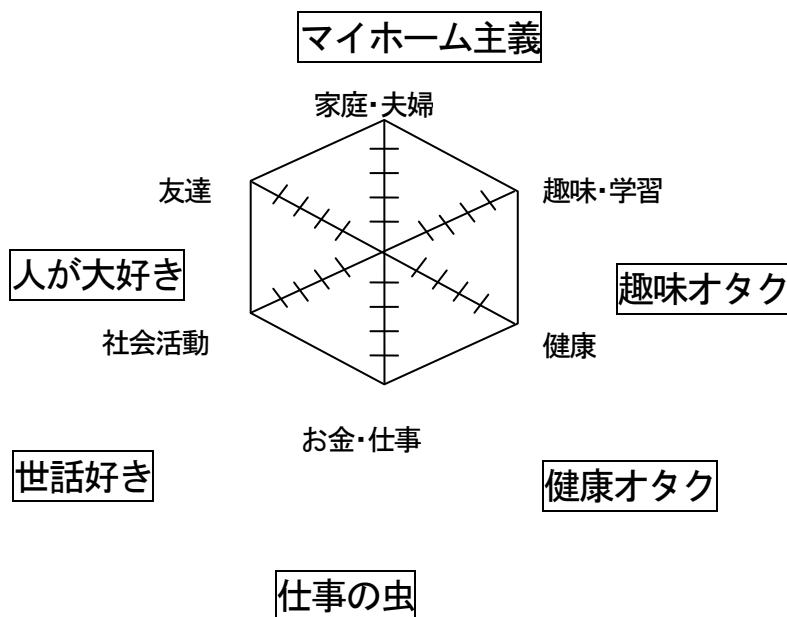


(2)ダイアグラムで豊かさ満開にする法

①どうすれば充足度がアップするか。作戦を考える。

この女性の場合、収穫した野菜で仲間と料理作り。それなら火も使える。作ったおしんこを配れば「社会活動」。おしんこを市場で売ればお金にもなる。活動が活発になれば「健康」も改善。「趣味」も充実。結局、赤線のように改善される。

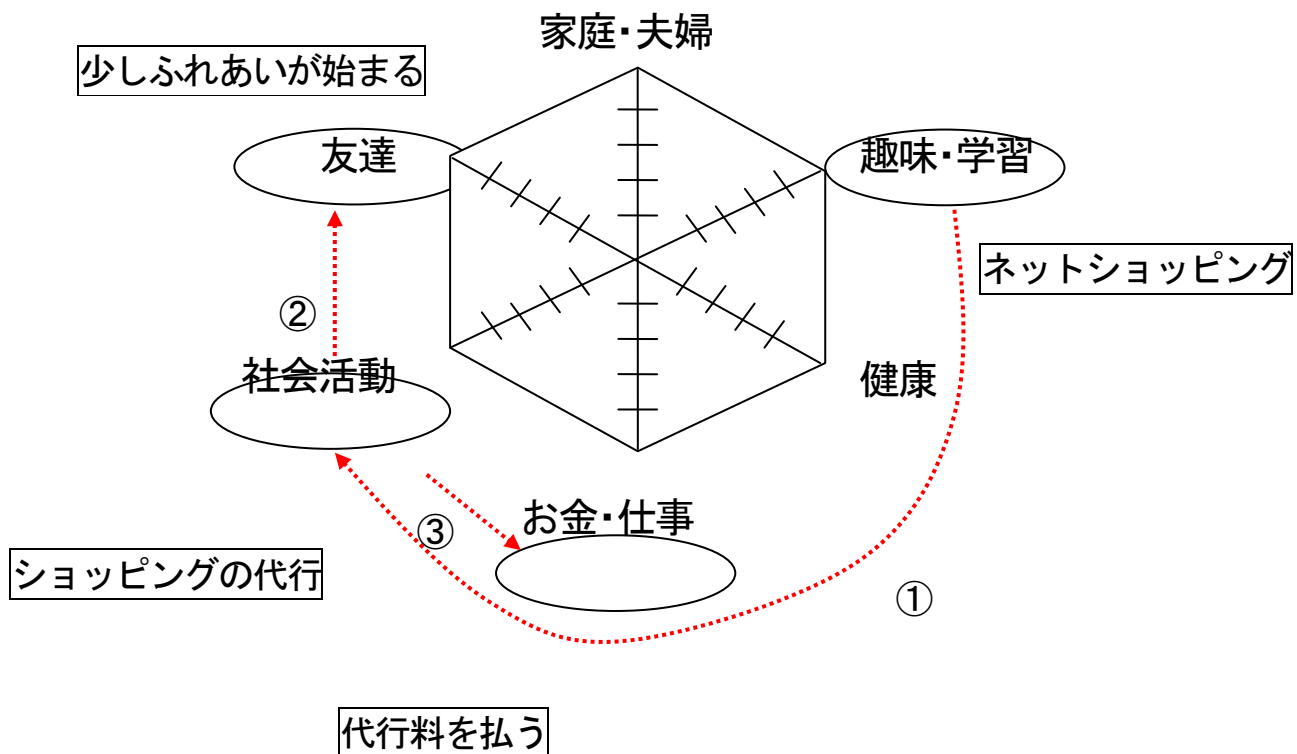
②こだわりの対象は趣味とは限らない。



それこそが「自分らしい生活」の特徴だ。私たちは当事者の「自分らしい生活」を大事にしようとするならば、これを尊重しなければならない。引きこもりの人を何とかこじ開けようとするが、本人は「友達」「ふれあい」にあまり関心がないだけのことなのだ。その人はおそらく、他のことにこだわっているから、それに乗ればいいだけのことなのだ。

③効率的な豊かさ満開策を考える。

この6つを個別に追究しても、「虻蜂取らず」になってしまう。それよりも、基点になるものがあって、それを基に、ついでに他の項目も充足させてしまう方がいい。一石六鳥作戦だ。



例えば前述の中村さんの場合。趣味のパソコンの組み立てやビデオの技術を使って、自宅で講座を開いたり、修理や録画のサービスをすることで、当然、ふれあいが豊かになり、少しは収入が見込めるようになる。

④①→②→③の流れが要援護者の場合によく使えるパターン

要援護者はその状況から、人に助けをもらう一方になりがちだ。「社会活動」が

不充足になりやすい。そこで本人の趣味を生かして、人の役に立てるように仕掛ければ、そこから「ふれあい」が生まれ、場合によっては「収入」が見込める。

(3)ダイアグラムが教えてくれる豊かさ満開の原理

①引きこもりの人もこだわりの対象は持っている。そこから接触を。

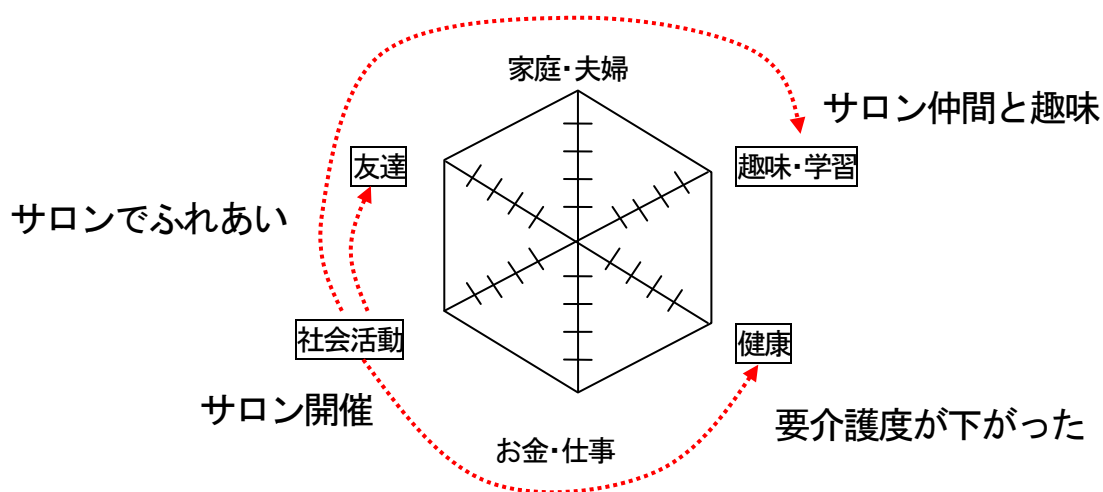
むやみにこじあけたり、サロンに招待しようとする必要はない。前頁のダイアグラムにあるが、あるOLが職場でセクハラを受けて、家の二階に引きこもってしまった。絶対に外には出てこないと言った隣人は言う。

では家で何をしているのかと聞いたら、何もしていないと言う。職場でパソコンをいじっていたに違いないというと、確かにパソコンは操作していると。パソコンで何をしているのか。ネットショッピングをしているらしいということが分かった。

考えられる作戦は、家に押しかけて「俺のも買ってくれよ」。拒否されてもかまわずに、「(店舗ページを)開いてくれ」。そして「それがいい、それを買ってくれ!」。こうやって「ボランティア」をさせる。他の人も押しかける。「それなら代行料を払おう」となる。ここまでくれば「ふれあい」も最低始まるし、収入も見込める。

②「健康」は他の5つの項目が充足されれば改善される。その逆もある。

例えば、(家庭)家でDVの被害に遭えば、「健康」度は下がる。(友達)いじめに遭えば同じようになる。(仕事)職場でパワハラを受けても同様。その反面、要介護者が人のために尽くして喜ばれればその分「健康」(介護予防)が改善される。



③要介護者がボランティアから入って要介護度が下がる例も

70歳半ばの女性。夫は80歳で癌に。本人は要介護3で障害も。ケアマネは「奥さんだけは施設に入れましょう。でないと夫婦共倒れになりますよ」と説得したが聞き入れない。

仕方なく介護ボランティアにその後を託したが、そのボランティアたちは彼女に何をしたか。なんと彼女に自宅開放でふれあいサロンを開いてもらった。そこでふれあいが盛んになり、一緒に趣味を楽しむ。おまけに要援護の一人暮らし高齢者を受け入れて面倒もみた。おかげで要介護度が下がって医者をおどかせた。

④精神障害は何ともできないが、自分らしい生活への支援はできる

「問題」の方はどうしようもないという場合がある。そうすると、ワーカーの方も無力感に苛まれる。しかしその人にとってのメインの関心は「自分らしい生活」ではないかと考え直したらいい。

精神障害で悩み続ける女性。しかし彼女には楽しみな趣味があることが分かった。一つは詩を書くこと。もう一つは雲の絵を描くこと。ならば、これを応援しよう。詩集をまとめて発行しよう。雲の絵が何作かまとまったら、展覧会を開こう。それが彼女にとっての自己実現であり、これこそが彼女が生きる目的なのだ。障害の方はどうしようもないが、それは彼女の「自分らしい生活」を妨げるものではないのだ。「自分らしい生活」の支援が福祉のメイン活動だとしたら、ワーカーは立派に「福祉活動」をしていることになるのだ。

同じく精神障害で悩む女性。おまけに生活保護費を男に掠め取られる。買い物症候群もある。惨憺たる状態だが、彼女に何か特技はないかと聞くと、元看護師だったという。それに精神障害者の支援センターには通っている。

この2つを生かせないかとワーカーに言ってみたら、その支援センターで精神障害者たちのレクが行われることになり、彼女が彼らの健康チェックを受け持つことになったという。

⑤知的障害などの場合「趣味」は「能力開発」とすべし

知的障害の場合、ダイアグラムの中身が変わってくる。単なる趣味では救われな

い。ここは「能力開発」にすべきである。潜在している能力・才能を開花させるという仕事がワーカーにはある。そのことで彼らに必要な「仕事」が得られる。

⑥仕事にまで発展させていくには、並み以上の資源が必要

「能力」開発から収入の得られる「仕事」につなげていくには大きなハードルがある。もともと一般の人よりも能力的に劣っている障害者から能力を引き出し、仕事にまで発展させていくには、強大な資源が欠かせない。

韓国の少年院でユニークな企画が展開されている。彼らに入所中に国家資格を取得させてしまおうという。一人ひとりにパソコンを与え、指導者にはサムスの技術者も加わった。おかげで退所と同時に就職できる者も現れた。「もうすぐ国家資格を取れるので、あと少し居させてほしい」と言う者もいるという。一時期国民がこれに激怒したという。「わが子にさえまだパソコンを与えていないというのに」。えこひいきにもほどがあるというわけだ。これに対して所長はこう言ったという。「ならばあなたのお子さんを少年院に入れますか？ いやでしょ？ この子たちは大きなハンディを抱えているのです。せめてこの程度のことはしてあげなくては」と言うわけである。

所長のやり方に本来のあるべき障害者福祉の原理が含まれている。もともと大きなハンディを負わされた者に、一般並みの資源を与えても、一般並みの能力を獲得することはできない。むしろ一般以上の資源を特別に提供することで、初めて一般と同じ能力が発揮できる。そのために所長は、一人ひとりにパソコンを与え、サムスの技術者に協力を求め、入所中に国家資格を取得できるための配慮をした。

この「一般並み」から「一般以上」という点に最大のポイントがあるのだ。

舞鶴市に精神障害者たちが働く超高級レストランが開業した。普通、彼らの働く場と言えば「作業所」で、福祉センターの一角で、家族の支えでかろうじて運営できている、といったイメージがある。舞鶴市のはちょうどこれと反対だ。毎日一定の数のお客しか受け入れない、文字通りの超高級レストランなのだ。むろんそれなりのシェフが料理を作るし、運営者もプロ中のプロだ。精神障害者の職場と聞いて、当初は地元で反対運動が起きたが、運動のリーダーが料理を味見して、がらりと態度を変えた。「このレストランはわが街の誇り」と。

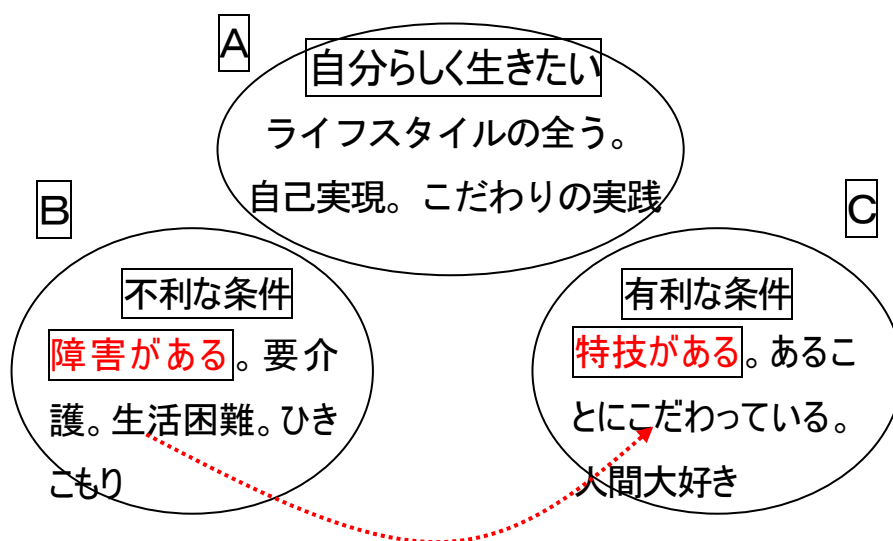
重要なことは、こうした超一流の職場で彼らが働いていれば、彼らに対する偏見が消えていくということである。だから精神障害者関連のワーカーに限らず、ハンディを抱えた人たちの福祉を担っている人たちは、資源の調達で、このような発想を持っていなければならないのだ。

⑦「障害はじつは才能だった」という新しい視点

障害者の能力開発に新しい発想が登場した。今までは障害者の能力開発と言えば、障害の部分はあきらめ、残存能力を探し出そうという発想だった。新しい発想とは、むしろ障害の部位に着目して、それを能力に逆転利用できないかというのである。

アメリカの自閉症者の職能開発センターではそうした発想で職業開拓が行われている。例えば自閉症者が印刷所で働くことになった。自閉症者の中には、壁のちょっとしたシミが気になる。それは確かに「障害」の表れではあるが、これを「才能」と見直して、それが生きる場を探したら印刷所だった。印刷ミスを瞬時で見つけるという。

同じく、自閉症の子を持った父親がデンマークで新しい事業を立ち上げた。コンピューターのソフトのストレステストをやるのだが、一般人は何度も繰り返すと飽きてしまってテストにならなくなる。しかし自閉症の子は同じ動作を何度やっても飽きない。同じ正確さでチェックができるのだ。



図を見ていただきたい。ここまでは、不利な条件と有利な条件はきれいに分か

れていた。しかし今紹介した事例は、本来は「不利な条件」に属するはずの事実が、じつは「有利な条件」にもなるということではないか。

障害者に限らず、左の不利な条件も、考え方や発想を変えることで、有利な条件になることもあるということである。

⑧要介護度が高くても「自分らしく」の追求の権利が

要介護になってもお楽しみに参加させようと言うと、プロは必ずその人の要介護度はいくつかと聞いてくる。要介護度が高ければお楽しみはあきらめろと言うのだ。

これは「不利な条件」を「自分らしい生活追求」よりも高次に据えた、誤った考え方である。どんなに要介護になろうとも、まず本人は何をしたいのかを確認し、それが実行できるようにギリギリまで頑張るのが、本当のプロのあり方なのだ。「できない」と言う前に「できる方法を考える」のだ。何を置いても豊かさダイアグラムを測ることから始めよう。

その人の生きる態度や行動次第で要介護度はいくらでも変わってくる。自分らしい生き方を実行した結果、要介護度が変わったという事例はいくらでもある。

⑨「困った御仁」にこそ「自分らしい生活」支援を

地域には「困った御仁」が一定数いて、周辺住民を困らせている。関係者もどうしたらいいかわからない。遠巻きに見つめているだけだ。周囲の人に暴言を吐く人、家の周囲を散らかし放題の人、ラジオを大音響で聞く、ゴミ屋敷、母を虐待する息子、要介護の妻を囲い込む夫など。

しかし忘れてはいけないのは、そんな人たちもやはり「自分らしい生活」をしたいと思っているし、その努力はしている。

「なんでそんな人の『自分らしい生活』まで支援しなければいけないのか？」などと言ったらおしまいである。その人もまた豊かさ満開度が充足されてないから、そういう行動になってしまうという可能性もある。

そういう人こそ、むしろ優先的に豊かさダイアグラムを満開にする応援をしなければならない。そういう「御仁」の場合、付け入るスキがなくて、何もできないでいる場合が多い。しかしその人にはどんな楽しみがあるのかと聞いていくと、何ら

かのお楽しみを持っていることが分かる。そこから「付け込む」のなら可能なのだ。

こういう人の場合「ボランティア」から入るのが順当なやり方である。何かをお願いするのだ。むしろその人がこだわっているものを生かす。不思議なことに、人は人のために尽くせたと思ったとき、充足感が生まれる。プライドの高い人、頑固と言われる人、引きこもりの人なども、何かをお願いすることで心を開き始める。